様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０１７７８

研究課題名（和文）認定こども園における遊びの質を保障する園庭環境評価規準（幼児版）の試案作成

研究課題名（英文）Draft Creation for Environmental Evaluation Standards to Guarantee the Quality of Play in Certified Children`s Institutions (Infant Section)

研究代表者
石倉　卓子（Ishikura, takako）

富山国際大学・子ども育成学部・准教授（移行）

研究者番号：９０４６１８５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：富山県内の幼保連携型認定Aこども園の園庭での遊びの質を5領域の内容から捉えた結果,領域「人間関係」に関わる内容が約38%と最多で,領域「環境」が約20%と続いた。また,全国115園の認定こども園のアンケートでは,人間関係,環境の領域に関わる内容が他の領域に比して多く,各々約32%であった。これらAこども園と全国のアンケートでは,いずれも,領域「人間関係」の内容（8）「友達と楽しく活動する中で,共通の目的を見いだし,工夫したり,協力したりなどする」が最多で, 内容（8）の半数が水の遊びと対応したことから,幼児の遊びの質を保障する園庭環境について部分的にではあるが関連性が推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
園庭での遊びの様子を5領域の内容と対比することで,園庭で経験できる内容と園庭環境との関係が部分的に明らかになったことから,幼児に経験させたい内容に応じた園庭環境を整えていける意義がある。なお,5領域とその内容は保育教諭と研究者の共通概念であるため,研究者の分析結果を実際の保育現場で活用することができる。さらに分析が進めば,遊びの質を保障する園庭環境を園毎に考えていける素地ができる。その結果,社会全体として幼児に質の高い教育・保育を提供していける可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The quality of play at A, a certified children’s institution (kodomoen) in Toyama Prefecture, has been documented with respect to the contents related to five domains. The results showed that contents related to the domain of human relations comprised the largest share at about 38%. Separately, a questionnaire survey of 115 certified children’s institutions nationwide showed that contents related to the domain of human relations comprised the largest share at about 32%. These two studies-the studies at children’s institution A and the nationwide survey-both showed that contents related to human relation(8) such as “being creative and cooperating with each other while engaging in fun activities with friends and finding common purposes” came out on top, and this contents and play involving water were related over 50% in both studies. For this reason, a correlation has been inferred, although partially, between the institution’s environment and the quality of infant play.

研究分野：幼児教育

キーワード：遊びの質　　5領域　園庭　　幼児　認定こども園

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

①研究の学術的背景

a)道具によって変化する遊びの評価の重要性

幼児教育・保育の現場では,「保育者自身が園児の遊びをどう引き出すかといった人的環境に目が向けられることが多く,園児が直接働きかける構築環境のあり方にはあまり議論がなされていない」（藤田 2000）との指摘がある。その後の研究では,園庭における幼児の動線分析・活動空間における遊び内容を検討したものや（横山 2004）,園庭の環境デザインの在り方と教育的意義について明らかにしたもの（浜田ら 2012）,自然に親しむことで育つ力を実証的に研究し,モデル実践の提案をしているものなどがあり（田尻ら 2012）,幼児にとっての園庭の意義が多方面から解明されつつある。道具についての研究は, 1 歳半から 2 歳児期の乳幼児の砂遊びについて加齢に伴う変化を追い,もの(道具類)の操作についての特徴を分析したものや（笠間 2007）,表現行為を可能にする自然材と道具の関係性について報告されているが（石倉 2013）,幼児は遊びの中で環境とかかわる際に多様な道具を使用しているにも関わらず,園庭環境とのかかわりを支える道具に焦点を当てた研究はきわめて不十分である。道具の使用があってはじめて教育のねらいが達成される場合もあるため,そこにも目を注いでいく必要性がある。

b)認定こども園における園庭での質の高い幼児教育を確保する緊急性

日本では, 平成 27 年度より子ども・子育て支援新制度が実施される予定であり,まさに目前に迫っている。平成 24 年 8 月には子ども・子育て関連 3 法が成立し,質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的な提供が第１の目標に掲げられており,その達成の主たる手段とされているのが認定こども園の普及である。現在,どれだけ戸外での遊びを保証していくのかという,教育・保育の中身のモニタリングと評価の重要性が高まっており,各国でも,ECEC（乳幼児期の教育とケア）に注目し始め,世界中が保育の質を重要視し,OECD が調査・提言を行うに至っている。わが国でも,質の高い幼児教育のための,戸外での遊びを保証する園庭環境を,これまでの様々な研究成果や新たな知見を得て緊急性をもって対応していく必要がある。

c)遊びの質を保障するための園庭環境評価の必要性

平成 25 年に日本では, 認定こども園を新たに作る場合に園庭の設置を義務付け,園舎と同じ敷地や隣に確保するよう求めつつも, 屋上に便所や水飲み場を設け,避難用階段や転落防止の措置など要件を全て満たせば,屋上を園庭とできるようにした。これに伴い,今後,認定こども園における園庭環境の格差が問題になることが予想され,遊びの質がさらに問われることになろう。遊びが発達の基礎を培う重要な学習であり, 遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されることが肝要であるため,認定こども園の自己評価のための園評価規準の検討が今後予想される中,園庭評価規準試案を示すことは,重要なステップであると考える。園庭評価研究の方法には,環境測定尺度『保育環境評価スケール　幼児版』（訳：埋橋 2004）,遊びの質に関しては幼児の「夢中度」に関する評価尺度（Laevers2005）等があるが,道具に関する評価も十分でなく,遊びと教育の関係性を論じにくい。また,園が日常的・主体的に自己評価するには複雑さや具体性において壁がある。「遊びを中心とした豊かな生活」「環境を通した教育及び保育」は認定こども園の眼目であり,遊びの質を保障する園庭環境評価規準を試案することはそれに直結すると考える。

２．研究の目的（研究開始当初）

幼児の園庭での遊びが道具によって変化することに着目し,その視点も加えながら,幼児教育・保育・環境教育・建築学の総合的な観点から,認定こども園における遊びの質を保障する園庭環境評価規準（幼児版）の試案を作成する。

３．研究の方法

＜概要＞（研究開始当初）

認定こども園の園庭での遊びの質を「教育及び保育のねらいや内容等」の視点である 5 領域から評価し, 園庭環境評価規準試案（幼児版）を作成する。また,これまでの様々な研究成果や幼児教育・保育・環境教育・建築学の観点,日本各地の認定こども園でのアンケート結果をもとに,遊びの質を保障する園庭環境評価規準に関する資料を作成し,関連機関に送付する。

＜詳細＞（実際）

① 全国（東京,愛知,福岡,富山）の協力園を訪問し,園長に認定こども園の園庭における様々な実状について聞き取り調査を行う。連携研究者に,研究の流れについて専門的な知識を提供していただく。

② 富山県の幼保連携型認定 A こども園において,研究代表者や分担者が撮ったビデオ記録の遊び場面を振り返り,「5 領域チェックシート」の内容の中で対応していると思われる項目を 3 つ程度まで記録用紙に記入する。チェックシートは幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成 26 年告示）の 5 領域各内容の番号と対応している。また,その遊びが可能になっていると思われる道具も記入する。なお,記録用紙への記入は教育・保育現場の年間カリキュラムになるべく沿うように,平成 28 年 5 月,7 月,11 月,平成 29 年 2 月の全 4 回（4 日間）行う。ビデオ記録は,午前中の遊びの時間帯（約 1 時間）に行い, 遊びが行われている

園庭の各コーナーを約 10 分間隔で順に撮影する。もう 1 台は園庭全体を見通せる当園屋上で定点撮影する。

③ A こども園の 3,4,5 歳児の担任保育教諭各 1 名が, 4～5 月,6～8 月,9～11 月,12～3 月の年 4 回に分けて,その時期の遊びの様子を②の要領で記録用紙に記入する。連携研究者に A こども園を見学していただき,遊びの様子や読み取りの仕方等について,研究者に専門的な知識を提供していただく。

④ ③の記録を分析,考察する。

⑤ 平成 30 年 1 月に,公私立及び各類型,都道府県,法人等に配慮し,名簿掲載順に全国 400（平成 29 年度全園の約 1 割）の認定こども園を選定して,アンケートを送付する。その際の「5 領域チェックシート」は, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成 29 年告示）と対応。

⑥ 平成 30 年 3 月までに返送されたアンケート 115 園分のデータを処理し分析する。
（※平成 30 年 7 月～9 月、研究代表者病気入院により一時中断。）

⑦ ④と⑥の結果を比較検討し,考察する。連携研究者に A こども園を見学していただき,研究者に建築学の側面から専門的知識を提供していただく。

⑧ 平成 31 年 3 月には⑦の分析結果をもとに,研究成果の一部をアンケート協力園や関係機関に郵送する。

４．研究成果

＜概要＞

試案作成には及ばなかったが,富山県内の幼保連携型認定 A こども園の保育教諭が,園庭での遊びの質を 5 領域の内容から幼児の経験として捉えた結果,領域「人間関係」に関わる内容が約 38%と最多で,領域「環境」が約 20%と続いた。また,全国 115 園の認定こども園のアンケートでは,人間関係,環境の領域に関わる内容が他の領域に比して多く,各々約 32%であった。

これら A こども園と全国のアンケートでは,いずれも,領域「人間関係」の内容（8）「友達と楽しく活動する中で,共通の目的を見いだし,工夫したり,協力したりなどする」が最多で挙がり, 内容（8）の半数が水の遊びと対応したことから,幼児の遊びの質を保障する園庭環境について部分的にではあるが関連性が推察された。

＜詳細と今後の課題＞

全国の協力園訪問では, 幼保連携型認定こども園に移行した後に子どもの人数が増加し、園庭で遊ぶ時間をクラスごとに分けて設定している園や、隣接した土地が園庭となったが死角があり、遊びの継続が難しい園など、園庭における様々な実状を知ることができた。このような実状を踏まえて,研究を進めることとなった。

まず,富山県内の幼保連携型認定 A こども園の園庭での遊びの質を 5 領域の内容から捉えることを試みた。遊びの質については「遊びを支える環境や経験」として解釈し,遊びの質の中の経験を捉える方法として, 5 領域の各内容を用いることとした。内容とは,保育教諭が保育のねらいを達成するために指導する事項ではあるが,幼児の発達を見る側面でもあるため,本研究では, 5 領域の内容を,遊びの中で幼児が経験していること,として扱った。その際,どのような園庭環境であったのかを整理したいと考えた。なお,最終的には保育現場に活かせる研究とすることが目標であるため,研究者と保育実践者の共通認識できるツールであることも選定理由の一つである。

年 4 回に分けて, 3,4,5 歳児の担任保育教諭各 1 名が,保育を振り返りながら記録した遊びの様子と 5 領域の内容を対比させ,特に関連すると思う 5 領域の内容を 3 つ程度まで選択した。記録の時期によって事例の多少はあったが,研究者が集計した結果, 幼児期の 3 年間にわたり指導する 5 領域の内容 53 項目の内 29 項目が対応し,年間を通してみると,人間関係の領域にかかわる内容が全体の約 40%,環境の領域にかかわる内容が全体の約 20%,次いで健康の領域が続いた。記録した遊びの場は 17 か所に集約されたが,特に,感覚遊び・造形遊び・作った物を使用するごっこ遊び・全身を使った遊びなどができる泥（粘土）山付近での 5 領域の内容は 19 項目,集団で鬼ごっこやボール遊び・雪遊びなどができる広さのある場での 5 領域の内容は 13 項目が挙がり,他の場と比べて対応する 5 領域の内容の項目数が多かった。また,水の遊びの事例は全事例 61 のうち 16 あり,全体の約 26%で,遊びに使用する自然素材の中では最多であった。次いで「泥（粘土）」の表記のある事例が 14 あり,約 23%であった。

同様に,全国 115 園の認定こども園のアンケートにおいて,園庭での遊びの質を 5 領域の内容で捉えることを試みた。一年間を通じて,幼児が「豊かな経験」をしていると保育教諭が感じた遊び 1 事例と, 同要領（平成 29 年告示）5 領域の内容との対比では,人間関係,環境の領域にかかわる内容が他の領域から抜きん出て多く,それぞれ約 32%,次いで表現の領域が続いた。中でも,人間関係の内容（8）「友達と楽しく活動する中で,共通の目的を見いだし,工夫したり,協力したりなどする」が全体の 40%,環境の内容（4）「自然などの身近な事象に関心をもち,取り入れて遊ぶ」が全体の約 30%を占めた。事例の中で多かった遊びは,「砂・水・泥」を使った遊び,作る・創作・工夫がみられる遊び,ごっこ遊びや真似る遊びなどであり,特に砂場や土の地面,手洗い場がその遊びに関連した。また,事例に挙がった遊びでは約 90%の園で器具や道具を使用しており,その際の保育教諭の援助については,「一緒に考える」「思いを受け止める・応える」との記述が多かった。年齢と場所,時期と場所についての関連性は特にみ

られなかった。なお,遊びの事例の自由記述では,水の遊びの事例は全 106 事例（有効回答数）中 38 事例で約 36%を占め,水の遊びは,領域「人間関係」の内容（8）が挙げられた全事例の 50%を占めた。さらに,自由記述データをテキストマイニングで分析した結果,「水」と「砂場」という言葉が共起ネットワークでつながっており,頻出数も最多で,多次元尺度でも中心付近に分布していた。あくまでも園 1 事例のみの分析ではあるが,豊かな経験を保障するには,園庭には少なくとも水や砂,それらを使用する場の必要性が推察された。

これら A こども園と全国のアンケートでは,事例の挙げ方に違いはあるが,いずれも,人間関係の内容（8）「友達と楽しく活動する中で,共通の目的を見いだし,工夫したり,協力したりなどする」が筆頭に挙がり,その半数が水の遊びと対応したことから,園庭における遊びの経験と園庭環境の関連性が部分的ではあるが推察された。また,保育教諭は水の遊びを通して,領域「人間関係」の内容（8）の経験ができるよう考える傾向がある,もしくは,援助しやすいという特徴があるとも考えられる。A こども園で挙がった事例は,保育教諭が覚えていた事例,もしくは印象的であった事例に比して,全国のアンケートの事例は「豊かな経験をしていると思った遊び」と問うていることから, 領域「人間関係」の内容（8）は,水遊びを通して保育教諭が望む傾向の高い子どもの姿であり,質の高い遊びであるととらえている,と言えるかもしれない。

研究者のビデオ分析では, 全身で関われる場,試すことができる道具や場,探したり観察したりできる道具や場,友達の遊びの様子をゆっくり眺められる場などがあり,それらの環境により,目的や道具による経験の幅の広がり,素材や広さが十分あることによる子ども同士の関わり,同じ遊び場でも思いや使用する物による経験の変化,物や空間特性そのものによる内面の変化などがみえているが,5 領域の内容についての分析は現在進行中である。

建築学の観点についても分析に十分活かすことはできていないが,アフォーダンス,アクティビティ,環境心理学などの視点から,園庭におけるわかりやすさと多義性,園舎内外を一体的にみる視点等が挙げられた。場一つ一つと言うよりも、心と体が連続して一体的に成長しているように、風景も流れ（シークエンス）があるため,園庭での遊びを静的にみるより,時系列でのつながり（因果関係）をみることが肝要であることが指摘された。一人の子どもを理解するときに,現象（一点）をとらえたようであっても,多面的にみること,風景は立点や視高（どこからどうみるか）があること,風景は物理的なことばかりでなく心でもあるため,時間の流れを共に体験していると捉えると,物を見ているほうも見られているほうも変化していること,本研究で観察記録した春から冬の流れを捉えるときも,連続性をみていると意識する必要があることを考察の仕方に活かす必要があろう。なお,環境は,つくる,活かすものであり,保育においては最低限必要なものをそろえていくこと,今ある環境を活かすことが求められる,との観点は,遊びの質を高めるという次の段階を示唆するものである。

現時点で試案という形には至らなかったが,遊びの様子を 5 領域の内容から捉えることで,それぞれの園の園庭で経験できる内容を考える機会となり、遊びの質を問う際は,道具の使用や保育教諭の援助も切り離せないことを再確認することとなった。今後は,遊びの流れを追いながら遊びの質について検討する必要があると考えているが,研究者や保育教諭の遊びの見方・考え方についても考察し,さらには,園の方針やカリキュラムなども考慮しながら, 試案という枠にとらわれず,保育教諭が遊びの質を保障する園庭環境を探るための方途を見出したい。

5．主な発表論文等

〔紀要論文〕（計 2 件）

・石倉卓子・竹田好美（2016）「幼保連携型認定こども園の実情と課題－子ども・子育て支援新制度のスタートにあたって」富山国際大学子ども育成学部紀要,第 7 巻,1-10
https://www.tuins.ac.jp/library/2016_mokuji_kodomo.html

・石倉卓子・竹田好美（2019）「認定こども園の園庭における遊びの質を考える－保育教諭がとらえた幼児の経験から－」富山国際大学子ども育成学部紀要,第 10 巻,1-26
https://www.tuins.ac.jp/library/2019_mokuji_kodomo2.html

〔学会発表〕（計 6 件）

・日本保育学会第 69 回大会　口頭発表（石倉卓子・竹田好美連名発表）
「幼保連携型認定こども園の園庭における保育の実状」
2016（平成 28）年 5 月 7 日-8 日 東京学芸大学

・ 日本保育学会第 70 回大会　口頭発表（石倉卓子・竹田好美連名発表）
「幼保連携型認定こども園の園庭における保育の実状Ⅱ」
2017（平成 29）年 5 月 20 日-21 日川崎医療福祉大学

・日本保育学会第 71 回大会　口頭発表（石倉卓子・竹田好美連名発表）
「認定こども園の園庭における遊びの実状」
2018（平成 30）年 5 月 12 日-13 日 宮城学院女子大学

・保育教諭養成課程研究会　ポスター発表（石倉卓子・竹田好美・神長美津子・宮里暁美・建部謙治・田尻由美子・大方美香・ 柿沼芳枝・中田範子・島田由紀子連名発表）
「認定こども園における遊びと援助についての調査報告」

2019（平成 31）年 1 月 14 日　国立オリンピック記念青少年総合センター
・日本保育学会第 72 回大会　口頭発表（石倉卓子・竹田好美連名発表）
「認定こども園の園庭における幼児の遊びの質に関する検討」
2019（令和元）年 5 月 4 日-5 日 大妻女子大学

・日本保育学会第 72 回大会 自主シンポジウム
『“場”がひろげる遊びの世界」
企画：香曽我部琢（宮城教育大学）
話題提供：松延毅（出雲崎保育園）,石倉卓子（富山国際大学）,
竹田好美（富山国際大学）,中田範子（東京家政学院大学）
指定討論：宮里暁美（お茶の水女子大学）

〔図書〕特になし

〔産業財産権〕
○出願状況　　特になし

〔その他〕
ホームページ（研究成果一部公開）
https://www.tuins.ac.jp/child/teacher_ishikura_takako_achivement.html

６．研究組織
（1）研究分担者
研究分担者氏名：竹田　好美
ローマ字氏名：Takeda yoshimi
所属研究機関名：富山国際大学
部局名：公私立大学の部局等
職名：講師
研究者番号（8 桁）：20469472
（2）連携研究者
連携研究者氏名：神長 美津子,宮里 暁美,建部 謙治,田尻 由美子
ローマ字氏名：Kaminaga mitsuko, Miyasato akemi, Tatebe kenji, Tajiri yumiko
（3）研究支援者：保育教諭養成課程研究会保育教諭専門性部会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。